

訳注：周作人著「日本近三十年小説之発達：1918
年4月19日北京大学文科研究所における講演」
(上)

九州大学大学院「文芸・文化交渉論D」翻訳グループ

秋吉， 收

九州大学大学院言語文化研究院国際文化共生学部門・国際文化学講座

<https://doi.org/10.15017/7410589>

出版情報：言語科学. 61, pp.29-35, 2026-03-14. 九州大学大学院言語文化研究院
バージョン：
権利関係：



訳注：周作人著「日本近三十年小説之発達」 —1918年4月19日 北京大学文科研究所における講演（上）

九州大学大学院「文芸・文化交渉論D」翻訳グループ共訳：秋吉 収監修¹

私たちは通常、日本文化に対して、たいてい一種の先入観を有しており、それは“模倣”から来たという。西洋にも「日本の文明は支那の娘だ。」と言う人がいる。この言葉にはもともと原因がないわけではないが、しかし完全に的確というわけでもない。日本の文化は、おそらく“創造の模倣”であると言えるだろう。この名称は難解なようだが、イギリス人 Laurence Binyon²が著した『亜細亜美術論』の中に日本美術を論ずる一節があり、極めて優れるのでここに書き写して説明となす。

“一方から見れば、日本のあらゆるものはすべて支那から来たと言える。だが、そのように言うなら、西洋各国の事はすべてユダヤ、ギリシアそしてローマから来たとも言えることになる。世界中の民族で、極めて精緻なる創造力と感受性を必ず有してこそ、はじめて日本のような成果を上げることができる。彼らの美術は、たとえ力を尽くして支那の作品を模倣する時も、やはり依然として一種本来の情趣を含んでいる。彼らは何百年というもの、支那の規律に従いつつも、またこれほど多く生気に満ちた独創的な作品が造り出せたのであり、彼らが特殊なる本来の姿と唯一なる柔軟性（Docility）を具有することを見てとれる。もしも、誰かが Ingres（アングル）の絵はただ Raphael（ラファエロ）を模倣したに過ぎないと言うなら、それはやはり浅薄なる見解である。いま仮に、日本の美術はただ支那を模倣したに過ぎないと言うなら、すなわちそれも同じく浅薄な観点である。”『The Atlantic Monthly』³一六之三⁴

¹ 本稿は、九州大学大学院地球社会統合科学府にて開講された授業「文芸・文化交渉論D」における参加学生と担当教員秋吉の対話の記録である。周作人（1885-1967）は、魯迅の弟としてまた日中戦争において侵略者日本に協力した漢奸として著名であり、その負の面から特に大陸中国においては一貫して忌避されてきた。だが魯迅自身が高く評価する周作人の文学性・学術研究は、現代においてもいまだ色褪せぬ輝きを放つ。特にその日本に対する研究の深さと量は当時において圧倒的であり、いまだ発掘・研究されるべき余地を多く残している。翻訳対象としたこの文章は日本の近代文学を手際よくまとめたもので、おそらくは少なからぬ参考書をモザイク的に寄せ集めた性格を有すると推察されるが、処々に著者の炯眼が披瀝され、大いに参考になる。先人の翻訳に公刊されたものはなく、今回、翻訳と注釈を上梓する所以のものである。今回の翻訳はその前半の一部であり、授業における担当は、汪さん、龍さん、上ノ原さんである（敢えて詳細は省く）。なおテキストは「周作人自編文集」（止庵校訂『芸術と生活』、2002年、河北教育出版社）所収「日本近三十年小説之発達——一九一八年四月十九日在北京大学文科研究所講演」による。

² Robert Laurence Binyon（ロバート・ローレンス・ビニョン、1869-1943）：イギリスの詩人、美術史家。1893～1933年、大英博物館に勤務、東洋美術の権威として『極東の絵画』Painting in the Far East（1908）を著す。世界各地を講演してまわり、1929年には来日。詩人としてはイギリス水彩画の影響も見られる穏やかな詩風。第一次大戦の兵士に捧げる「散ったもののために」For the Fallen はよく知られている。また『セイレン』The Sirens、『偶像』The Idols の2つのオードのほか、劇作やダンテの『神曲』の韻文訳も試みている。（『デジタル版 集英社世界文学大事典』等参照）。

³ 原文：《大西洋月刊》（The Atlantic Monthly）：アメリカ合衆国の代表的な総合月刊雑誌。1857年ボストンの知識人の間に文学、芸術、政治の雑誌として創刊。当初は命名者 O・W・ホームズ、編集長 J・R・ローウェルを中心にエマソン、ロングフェロー、ホイットィア等東部の錚々たる文学者が寄稿家に名を連ね、ニュー・イン

文学という分野においても、やはり同様である。そのため以前に中国の影響を受けたとは言え、しかし彼らの純文学は、依然として一種の特別な精神を有している。例えば歴代の和歌や、平安朝（780-1180）の物語、江戸時代（610-1870）の平民文学——俳句や川柳のたぐいは、すべて極めてよい例である。維新の後に至ると、西洋思想が優位を占めた文学にもある非常に大きな変化が生ずることになった。明治45（1910）年には、基本的にヨーロッパルネサンス（文芸復興）以来の思想を各階層ごとに浸透させており、現在にまで至って、すでに現代世界の思潮に追いつき、“生活の川”⁵の中で一斉に泳いでいる。表面的に見れば、西洋を“模倣”したとも言えようが、しかしその言葉に語り尽くされているとは限らない。上述のごとく、それはまさに創造的な模倣である。決して西洋の新思想を東洋の国粹と結びつけられればそれで良いと言うわけではなく、すべて思想である限り、人類の世界の傾向を有していればいほど良いのだ。日本の新文学はすなわち調和を求めず、ただ模倣に徹するのが良い、——また思想形式を模倣するだけでなく、その精神を自身の心に注ぎ込み、混ぜ合わせて、その後またそれをひっくり返す、そのように模倣しつつも独創なのが良いのである。たとえば、二人の人がいて、どちらも仏教の経文を読む。一人は世間の苦難を舐め尽くした者で、読めばすぐに感化され、しばしば人生の無常などを口にする；経文から読み取ったものではあるが、一方ではやはり彼自身が実感したものである。もう一人は裕福な読者で、同じ経文を読むが、だが彼はその經典上の説話を暗誦するだけだ。これがつまり二通りの模倣の違いであり、すなわち誠意が有ると無いとの違いである。日本文学界は、敢えて善に服する自覚を有するがために、誠意をもって“模倣”でき、だからこそ多くの独創的な著作を生み出し、20世紀の新文学を築き上げることができたのである。

私たちはいま、日本の最近三十年の小説の発達についてその概略を解説しようとするが、一方で前文で話した事実を証明することができ、またそれが次第に発達した経路を見て、中国の新小説界の事情と比較するのも、一つの頗る有益で興味に富むことである。

一 日本の最も早期の小説は、一種の物語の類で、それは今を去ること約一千年前の平安時代

グランド文化の機関誌的な色彩が強かった。1871年にオハイオ州出身のW・D・ハウエルズが編集長になってからは、西部出身のマーク・トウェーンや、南部の作家たちにも幅広く紙面を提供し、全国的な雑誌となった。現在では、国際問題や時事問題にも積極的に取り組み、『ハーバース・マガジン』と並んで、アメリカの総合雑誌を代表する。（『日本大百科全書（ニッポニカ）』小学館より引用）。

⁴ Binyon L. **The art of Asia**. *The Atlantic Monthly*. 1915:116(000003):348.

In a sense Japan owes everything to China. But it is in the same sense that the nations of the West may be said to owe everything to Judæa, Greece, and Rome. Only a race of the finest creative gift as well as the finest susceptibility could have been able to do what the Japanese have done; their art, even when most closely following Chinese example has always in it something of native mood and fibre. That they should have kept so close to Chinese tradition for many centuries and yet have produced a variation so alive and so continuously and freshly inventive, proves their unique docility. It is a superficial view which sees in a painter like Ingres only an inferior imitation of Raphael; and it is a superficial view which sees in the art of Japan only an inferior imitation of China. Even in the periods in which the main aim of Japanese masters was to emulate the Chinese the adored, there is always that spontaneous difference which reveals a creative element. But for my present purpose I shall single out only those phases of Japanese art which are most purely Japanese.

⁵ 水郷紹興出身の周作人の文学と「水」「川・河」に間には連関が想起される。彼には例えば、1919年2月『新青年』第6巻第2号に発表された「小河」と題する新詩があり、言文一致の口語自由詩が模索された時代にあって、その自然さと文学性の高さは胡適を始めとする新文学陣営から高く評価された。

に興ったが、そのうちでも紫式部⁶が著した『源氏物語』五十二帖⁷は最も有名である。鎌倉十三世紀室町十四・五・六世紀の両時代は、いわゆる武士文学の時代で、このたぐいの小説は、軍記に変化して、戦争のことを多く語った⁸。江戸時代十七世紀から十九世紀半ばまでに至って、平民文学が次第に興隆し、小説はまた大いに発達した。今これらの類のみを挙げ、分けて下記の八種とする。

- (一) 仮名草子⁹ 一種の志怪の類である。
- (二) 浮世草子¹⁰ 一種の社会小説で、井原西鶴が最も著名である。

⁶ 平安時代中期の物語作家、歌人。出生は天禄元年（九七〇）—天延元年（九七三）あたりと推定される。本名は不詳で、香子とする説があるが疑わしい。父は藤原為時。母は藤原為信の娘。「藤式部」が当時の女房としての呼び名であり、「紫式部」は、死後の呼称と思われる。「紫」は『源氏物語』の女主人公紫上に由来し、「式部」は父の官名「式部丞」に基づく。……長徳四年（九九八）、遠縁で父の友人でもあった藤原宣孝と結婚し、娘の賢子（かたいこ、のちの大式三位）を生んだが、長保三年（一〇〇一）四月に宣孝は急死した。その秋ごろから『源氏物語』は書き始められたらしい。その評判が高くなって、寛弘二年（一〇〇五）十二月二十九日一条天皇中宮彰子（上東門院、藤原道長の長女）の宮廷に召し出された。長和二年（一〇一三）秋ごろ、一旦宮仕えを退いたらしいが、寛仁二年（一〇一八）ごろ再び彰子に出仕、翌三年正月五日には取次ぎ女房として姿を見せる。それ以後のことは明らかでない。『源氏物語』の完成はおそらくは寛弘七年夏ごろか。（今井源衛）

⁷ 平安時代の物語。紫式部の作。五十四巻。ただし一部後人の補作とする見解もある。紫式部が夫藤原宣孝と死別した長保三年（一〇〇一）以後、寡居の無聊のなかで書き起されたが、その一部が世に流布して文才を認められ、藤原道長の長女、一条天皇中宮彰子のもとに出仕することになった寛弘二（一〇〇五）、三年以後も、折々里に帰って書き継がれた、と推定するのが妥当であろう。『源氏物語』は寛弘七年ごろまでに閉巻されたか。『源氏物語』は第一巻「桐壺」から第三十三巻「藤裏葉」までを第一部、第三十四巻「若菜上」から第四十一巻「幻」までを第二部、第四十二巻「匂宮」から第五十四巻「夢浮橋」までを第三部とするのが現在ほぼ通説となっている。……いったい平安時代には無数の物語が作られたが、それらは当時の正統の文学である漢詩文や社交の雅語として重んじられた和歌と違って、婦女子のもてあそびものと見なされていた。しかしながら従来の物語とは異質のこの物語の内容と文章とは物語についての観念の変革をもたらした。ことに正確な史実にもとづき豊富な典拠によっておし開かれてくるこの物語の世界の現実感には人々の心をゆり動かし、のちの文学史に多大の影響を及ぼした。物語・小説の歴史に限らず、中世の歌人にとってもこれは宝典であったし、謡曲をはじめとする芸能・演劇の世界にも再生しつづけた。（秋山虔）

⁸ 鎌倉・室町期「軍記物語」：相ついで起った内乱の記録に軍語りが結び付いて、多くの軍記物語が生まれた。まず承久の乱前後に、『保元物語』『平治物語』『平家物語』の最も原初的な本文が成り、承久の乱後まもなく『承久記』が書かれたと想像される。これらは初期の段階から琵琶法師の語りによって成長、変貌を遂げ、多くの異本が派生し、中世後期に入っても本文は流動していたと見られる。また、南北朝動乱のさなかに、おそらく物語僧などを中心として、『太平記』が書き継がれた。室町時代に入ると、『明德記』『応仁記』など、室町軍記が数多く生まれたが、それらにも物語僧の参加している場合が少なくないであろう。これらに対して、『曾我物語』や『義経記』は記録的性格は稀薄で、語り物としての成長の跡を濃くとどめている。（久保田淳）

⁹ 仮名草子は中世の小説と本格的な近世小説である浮世草子との過渡的な存在である。当時仮名和書とか草紙とか呼ばれた種類の作品を指すが、内容的には案内記や教訓書のような文学性の稀薄なものも含まれている。仮名和書とは漢籍に対して俗耳に入りやすい通俗的な仮名書きの和書の総称であるから、実用性・教訓性の濃い作品が混在することも当然である。……仮名草子の特徴の一つとして、教訓性が挙げられるが、特に思想啓蒙・教訓を主とした作品に如備子の『可笑記』、三教一致を説く『百八丁記』、儒教を勧める朝山意林庵の『清水物語』、その反駁書で仏教を旨とする『祇園物語』がある。また中世の懺悔物の系統を引くものとして、阿弥陀信仰を説いた『七人比丘尼』などがある。御伽草子と併存していた仮名草子が、幕府の文教政策や印刷術の発達、また一般庶民階層の向上などの諸条件のもとに、浅井了意や山岡元隣らの代表的作家が出現した。了意の『浮世物語』には新しい時代の息吹きが窺われ、中国怪談を翻案した『御伽婢子』などの一連の作品は近世怪異小説の基盤となった。だがあくまで知識人による一般民衆の啓蒙教化の段階でしかなく、真の意味での町人文学としての小説の出現は井原西鶴の『好色一代男』の刊行をまたねばならなかった。（堤精二）

¹⁰ 天和三年（一六八三）以後約百年間、もっぱら上方を中心に流行した近世小説。井原西鶴の『好色一代男』（天和三年）に始まる。それに続く西鶴好色物の諸作は、狭義の浮世（好色）の意味において「浮世本」また「色草紙」「好色本」とも称せられ、従来の教訓的、啓蒙的、実益的通俗読物（仮名草子）と一線を画するに至った。しかし西鶴は好色物から次第に小説の世界を拡大して、広く当代の世相・風俗を描くに至ったので、文学史の上では西鶴および西鶴以後の新しい小説を、広義の浮世（人生・世間・現代）の意味において「浮世草子」と称している。（野間光辰）

- (三) 実録物¹¹ 歴史演義。
- (四) 洒落本¹² また蒔蕨本と称し、多くが遊郭の情事を記す。
- (五) 読本¹³ また教訓読本と称す。
- (六) 滑稽本¹⁴
- (七) 人情本¹⁵
- (八) 草双紙¹⁶ 赤本・黒本・青本・黄表紙の諸称がある。また或いは合訂して、合巻物と称す。

この八種はいずれも通俗小説で、中等以下の社会において流行した。その中には時に佳作もあるが、文学の名称に値するものは、大多数がいずれも下層社会の心理に迎合して書かれ、そのため千篇一律で、特色に欠ける。著作者の地位も非常に低く、さながら画工あるいは講談師のようである。彼らは戯作者¹⁷と自称しもあるが、本を書く目的は、ただ娯楽を提供するか、あるいは

¹¹ 主に近世に起って、世間の耳目を集めた事件を、虚実おり交ぜて描いた小説体の読み物。実録体小説ともいう。内容が将軍家や武家の内情秘事に及び、政治に関する流言蜚語の類を含むため、幕府によるたびたびの禁令あって、出版は憚られ、写本で流布。読者は貸本屋を通じてこれを享受し、文字の読めない層は講談によってこれを聴くことができた。……文章は平坦だが筋は波乱に富み、内容は世の関心事だけに、事実として読まれ、広範囲の鑑賞者を得、その流れは現今の歴史小説にまで及ぶ。近世・明治初期にあつては、講談はもとより、同時代の脚本（浄瑠璃・歌舞伎）、小説（浮世草子・読本・草双紙）と密接な関係にあって、相互に影響し合った。（中山右尚）

¹² 江戸時代中期以降の小説形態の一種。京坂で行われた浮世草子のあとをついで、遊里に取材した文芸で、享保の中ごろに始まり、文政末年ごろまで出版された。典型的なものは、遊客・遊女などの姿態言動を会話を主とする文章で写實的に描き、簡単な小説的構成をとるものであるが、また戯文調の漢文や狂文をもってする遊里案内・遊客心得、あるいは遊里風俗誌・色道遊興論などもあり、趣向を凝らした絵本風のものなどをも含む。その表紙の色や形から茶表紙・蒔蕨本などの異称もあり、内容から粹書・通書などとも呼ばれた。洒落本の「洒落」とは、遊里社会を中心に発達した「通」という美的生活理念を軸として、人間の滑稽な生活を描くことを意味する。（水野稔）

¹³ 江戸時代中期以降の小説形態の一種。寛延・宝暦年間（一七四八—六四）に京坂に始まり、文化・文政年間（一八〇四—三〇）から江戸を中心として幕末まで刊行された、主として半紙本型の短編集または続きもの長編の小説である。読本の称は絵本・語り本などに対して、文を読むのを主とする本の義で、すでに浮世草子の八文字屋本などにも用いられていたが、やがて中国文学の影響による空想的、伝奇的な構成をとり、儒仏の思想的内容を盛り込んだ小説の呼称として定着した。中国小説の翻訳・翻案は江戸時代初期から行われたが、岡島冠山を中心として享保ごろ唐音・唐話学が盛んとなり、また中国の雑史・軍談が「通俗」の名を冠して多く翻訳され、三言二拍と呼ばれる明代白話（口語）小説類の翻訳が岡白駒らによってなされた。（水野稔）

¹⁴ 江戸時代後期、風刺・滑稽を主とした小説の形態であり、寛政の改革を界として、それ以前の前期滑稽本と、それ以後の後期滑稽本とに分けるのが普通である。厳密には、前期は風刺性・教訓性が強いので、談義本とか教訓本という別称があり、後期は『東海道中膝栗毛』を機に流行した滑稽のみを主眼とする小説を指している。（野田寿雄）

¹⁵ 江戸時代後期の小説のジャンル。洒落本のあとを承けて、洒落本とちがい多く婦女子を読者として文政初年から明治初年にかけて流行した写實的な恋愛小説の名称である。ただ人情本の名称は、文政末年ごろから為永春水一派の人々が自分たちの作品を人情本と称してのちに一般化したもので、普通にはその書型から滑稽本とともに中本、泣本とも呼ばれていた。人情本はテーマや表現技術を末期洒落本から多く受けつぎながら、婦女子を読者に予定することでそれにふさわしい題材や表現を加え、洒落本と違って遊里から離れ、中型絵入読本の名称が示すように、通俗的な世話話本として執筆されたところに成立する。（神保五弥）

¹⁶ 江戸時代中期から後期へかけて、江戸で刊行された大衆的絵入小説の一体。通常毎頁挿絵があり、これが主体となってその周囲をほとんどひらがな書きの本文が埋め、画文が有機的な関連を保ちつつ筋を運ぶ様式をとる。表紙色と内容の変化とがほぼ呼応して、赤本・黒本・青本・黄表紙と進展し、ついで装幀の変革を伴って合巻に展開、明治中期まで制作された。名称の由来については諸説あるが、草の字は本格に対する通俗雑多の意ととるのが妥当。内容は赤本は童幼向きの教化娯楽題材、黒・青本ではやや程度を高めて夢幻性を増し、黄表紙は滑稽洒脱の写実味が特徴、合巻は伝奇性の濃い特色をもつ。（鈴木重三）

¹⁷ 近世の中期から明治初年までに作られた、主として散文による俗文芸の総称。その作者層や作品の質などから、

教訓に相当するだけだ。当時の儒教主義時代において、元々それは文学と見なされなかった。明治初年に至っても、この様な戯作者はやはり頗る多かったが、彼らの意見もやはり同様であった。それゆえ明治五年（1872）に政府は教導職¹⁸に対して三条の教則¹⁹を發布したが、それは「一、敬神愛国の旨を体すべき事。二、天理人道を明かにすべき事。三、皇上を奉戴し、朝旨を遵守すべき事」である。——これらの教則を彼らに実行させようとした時、仮名垣魯文²⁰と条野採菊²¹の二人は小説家を代表して答申書²²を上呈しており、そのうちの何か所かは内容が絶妙であった。

寛政期を境として前・後二期に分ける。前期戯作はまさしく知識人の余技として始まった。本来伝統的文芸（雅の文芸）に従事すべき知識人が俗文芸に携わった時の言訳めいた命名として「戯作」といったのである。それは全く暇つぶしの余技もあり、また一端の知識人として社会に貢献すべく、俗文芸の筆法をかりて庶民教化を志したのもあった。前期の戯作者の大半が武士階級に属しており、しかも「笑」の文芸としての戯作の限界も見えてきていたこともあって、ほとんどがその筆を折り、作者層の大幅な転換が行われて、以後後期戯作の時代となる。その担い手たちは町人やごく下級の武士であり、戯作者になることがすなわち知識人として認められる筋道であるような人々であった。質的には低俗化する以外はなく、一方で「笑」からの脱却を図る向きは、主情的な人情本や伝奇趣味の草双紙に走って、それなりに洗練度を増しつつ大衆化の一途を辿るに至る。滝沢馬琴がみずから戯作者と呼ぶことを嫌ったのも、こうしたところにその理由の一つを求めることができよう。（中野三敏）（以上、注 6～17 は『国史大辞典』[1979-97、吉川弘文館] オンライン版による）

¹⁸ 明治五年（一八七二）に、宗教による一般国民の教化を目的とした政府の政策に基づいて設けられた職名、または、その職にある人。多くは神官、僧侶、学者などがこれに任じられた。明治一七年（一八八四）八月に廃止。（『日本国語大辞典』小学館、第二版による）

¹⁹ 1872 年（明治 5）4 月、国民教化政策の実施に際して、教部省が教導職に通達した教化の基準。三条の教憲ともいう。「敬神愛国ノ旨ヲ体スヘキ事」「天理人道ヲ明ニスヘキ事」「皇上ヲ奉戴シ朝旨ヲ遵守セシムヘキ事」の 3 条で、天皇崇拜と神社信仰を基軸とする近代天皇制国家の宗教的、政治的イデオロギーを集約し明確に示している。続いて教部省は、三条の教則を敷衍する説教の演題として「十一兼題」「十七兼題」を布達した。（『日本大百科全書』小学館、による）

²⁰ 仮名垣魯文（文政 12～明治 27：1829～1894）、戯作者、新聞記者。江戸京橋生れ。魚屋の子として生れたが、火災のために家がおとろえ、口べらしのために新橋竹川町の諸藩御用達鳥羽屋へ奉公に出た。丁稚になった彼は、京伝、一九、三馬などの戯作本を愛読し、当時の代表的文人であった細木香以に愛されて蔵書を恵まれ、遊里の供をおおせつかった。その香以のすすめで、戯作者花笠文京に入門し、和堂珍海、英魯文などと称して戯文を執筆したが、著述のためには遊蕩の経験も必要だと、妓楼にかよい、清元や常磐津の稽古所にいりびたり、やりくりの金に窮して主家にいられなくなり、放浪生活をおくるうち、合巻類を刊行し、嘉永六年夏、書肆から湯島妻恋町に家を買いたえられた。その家に「談笑諷諷、滑稽道場 御詠案文著作所 鈍亭魯文」の看板をだし、出版業者の下請け職人として、その注文のままに戯作を執筆し、瓦板や流行端唄のような極端に流行を追わねばならない仕事にも手をだして、のちの際物作家、ジャーナリストとしての基礎がここに成った。……五年四月、教部省が、「三条の教憲」を発令したさい、山々亭有人とともに、戯作界を代表して、七月に、『著作道書キ上ゲ』と題する答申書を提出し、従来の作風から新時代むきの作風への転向をちかった。

²¹ 条野採菊（天保 3～明治 35：1832～1902）、戯作者、新聞記者。江戸日本橋生れ。地本問屋に生れ、国文学の書物を愛好していたが、一七、八歳ごろから五世川柳の門に入り、出藍のほまれが高かった。本郷の呉服商伊豆倉の番頭時代に、老中阿部伊勢守にその学才を愛され、その庇護のもとに戯作界にはいった。為永春水以後において、もっとも美麗な人情本作家として、幕末戯作界を代表している。代表作に、『春色恋廻染分解こいのそめわけ』（万延元）『春色江戸紫』（元治元）『三人於七花暦封文』（慶応 2）などがある。また、文久の末から元治年間にかけて、三題断の自作自演グループ粋狂連を組織し、仮名垣魯文、瀬川如阜、河竹新七などの作家たちと創作活動を活発におこない、春風亭柳枝、柳亭左楽、三遊亭円朝などの落語家の技芸向上に寄与した。明治五年、教部省発令の「三条の教憲」にたいして、仮名垣魯文とともに、『著作道書キ上ゲ』という答申書を提出し、従来の戯作からの転向を誓ったが、それを立証するかのごとく、戯作者から新聞記者へと転身していった。……彼は、幕末人情本の代表作家として文学史上に足跡をのこすばかりでなく、創始期の新聞人として、さらには、初期の新聞小説作家としても記憶されねばならない。（以上注 20、21 は興津要執筆。『日本近代文学大事典』1984、講談社による）

²² 『著作道書キ上ゲ』は明治 5 年（1872 年）、仮名垣魯文と条野有人（採菊）の連名で教務省に出された上申書。このころ、明治政府の教務省は「三条の教憲」にもとづき、宗教・芸能・文芸を民衆の教化に役立てようとした。この方針のもと諸芸能の組織化が模索され、戯作者である仮名垣、条野も、政府の調査に応じ、「其他兩三名のみ（本文）」の四～五名で組合に類するものを結成しようとしたらしい。『著作道書キ上ゲ』はその折に政府に提出した上申書で東京日日新聞にも掲載された。『著作道書キ上ゲ』の本文は、前半 3 分の 2 ほどで戯作の歴史を述べ

“いま戯作をもって生業となす者、僅に私ども兩人及びその他兩三名のみ。これ他なく、智識日に開け月に進むが故に、稗史の妄語を卑しめ、二度と繰り返すことはない。……素より戯作は識者に示すに非ずして、ただ以て不識者を導化するものなり。もしもなお依然として守株するなら、ただ迂遠に陥り曖昧に流れ、其の弊ついに人を過つに至るべし。そのため爾後は従来の作風を一変し、謹んで教則三条の趣旨に本づき、以て著作に従事すべく決議せり。私どもは下劣賤業に属すといえども、ただ歌舞伎作者とはやや異なることあるを、ご賢察願えれば幸いなり。”

教部省へ差出したる書面

假名垣魯文
條野有人

今般著作業道原因委細以書附可申上旨御諭示ニ付則率建言候。抑戯作ノ儀ハ、虚ヲ主トシ實ヲ客トシ、或ハ事跡名籍ヲ借用シ、或ハ正史ヲ漢骨奪體シ、支那ノ羅漢中李笠翁等ノ小説、我源氏猿衣其他何物語ト唱フル物則是ナリ。然レトモ高貴英才ノ手ニ相ナリ自カラ巧拙操卓ノ別有之候得共、地ヲ變ユレハ後世ノ戯作ト其趣意同一種ト奉存候。夫ヨリ星霜幾多ヲ經テ浪花ニ井原西鶴・八文字屋自笑等、古昔ノ物語ニ漢土ノ小説ヲ折衷シ一種ノ稗史ヲ著ハシ候ト雖トモ、未ダ戯作ノ稱ヲ唱ヘズ。ノチ安永年間東武三平賀源内ニ風來山人ナル者始テ戯作ノ稱ヲ唱ヘ、續ヒテ森島中良・立川焉馬芝全交明(朋)誠堂喜三・唐來三和等、戯著若干有之候得共、多クハ一時好奇ノ餘ニ探筆セシモノニテ、獨リ山東京傳戯作ヲ以テ生活ヲ計リシヨリ以降、曲亭馬琴・式亭三馬・柳亭種彦・十返舎一九等連綿輩出シテ、今日迄戯作ヲ以テ糊口仕候者數十名ナリ。然ルニ近年或ハ鬼籍ニ入り、或ハ他業ヲ營ミ、方今之ヲ以テ業ト仕候者僅ニ私共兩人其他兩三名ノミ。コレ無他、知見日ニ開ケ月ニ進ミ、稗史ノ妄語タルヲイヤシム所以ト奉存候。實ニ文運隆昌ノ今日ニ際シ、從前京師ヲ鎌倉ニ模擬シ其事柄ハ元祿以內ニシテ、其名籍ハ元弘建武ノ如キ、識者ハ其原由ヲ知ト云トモ、不識者ヲ迷ヒテ取候ハ勿論ノ事ニ御座候。素ヨリ戯作ハ識者ニ示スニ非ス、不識者ヲ導クモノニ候。尙依然トシテ守株仕候テハ、迂遠ニ陥イリ曖昧ニ流ル、而已ナラシ、其弊ツイニ人ヲ過ツニ至ルベシ。依テ爾後從來ハ昨風ヲ一變シ、乍愚教則三條ノ御趣旨ニモトツキ著作可仕ト商議決定仕候。就テハ下劣賤業ノ私輩ニ御座候得共、歌舞伎(作者)トハ自然有別儀ニ御座候間、右可然御合被成下度云々。

明治五年七月

(石川巖校)

【明治文化全集 第12巻〈文学芸術篇〉】(1928年、日本評論社)

この二節を見るに、当時の小説界の状況を窺うことができよう。明治の維新以降十七八年に至ると、国民の思想はすべて政治及び學術の面にのみ注がれ、文学のことはいまだ注意を払われなかったのである。翻訳の外国小説は大いに流行していたが、多くは英国の Lytton²³ と Disraeli²⁴ の

たのち、「教則三条のご趣旨にもとづき著作つかまつるべし」と政府の方針に従うことを上申している。

²³ Lytton: (Edward George Earle Lytton C, 1803-1873、初代リットン男爵は、イギリスの小説家、劇作家、政治家、貴族。小説『ポンペイ最後の日』(The Last Days of Pompeii) が代表作として知られ、戯曲『リシュリュー』(Richelieu; Or the Conspiracy) に登場する文句「ペンは剣よりも強し」(“The pen is mightier than the sword”) は名高い。政治家としては1858年から1859年にかけて保守党政権の植民地大臣を務めたことが特筆される。日本では明治維新によって西欧の新知識に触れることができるようになり、西洋小説も明治時代から翻訳されるようになった。西洋小説で真っ先に翻訳されたのがリットンやディズレーリの政治小説だった。

(Wikipedia: 2023年6月26日閲覧等による。2023年6月26日閲覧)

²⁴ Disraeli: ディズレーリ・ベンジャミン (Benjamin Disraeli, 1804-1881) は、イギリスの政治家、小説家。初代ビーコンズフィールド伯爵。ユダヤ系の文人アイザック・ディズレーリの長男としてロンドンに生まれた。26年に処女作『ヴィヴィアン・グレイ』Vivian Grey を発表して好評を博し、続きを書き加えて5巻本としてこれを刊行(1827)。次作『ポパニラ船長の航海』(The Voyage of Captain Popenilla) が28~31年にかけて、スペイン、イタリア、地中海、近東方面を旅行、小説のための多くの題材を得た。(松村昌家)『集英社 世界文学大事典』による)

政治小説の類いであつた。幾つか自分で著したのものが、例えば柴東海散士の『佳人之奇遇』²⁵、矢野龍溪の『経国美談』²⁶、末広鉄腸の『雪中梅』『花間鶯』²⁷等も、すべて政治を語ったものである。詩歌の面では、坪内逍遙・天野為之・高田早苗三人共訳の『春窓綺話』(Lady of the Lake)²⁸、坪内逍遙訳の『自由太刀余波鋭鋒』(Julius Caesar)²⁹があるが、何れも政治の気風を含んでいる。

²⁵ 柴東海散士『佳人之奇遇』：東海散士(1852-1922)は、政治家、小説家、新聞記者。本名柴四朗(しばしろう)。安房国(千葉県)生まれ。弟に陸軍大将柴五郎(1859-1945)がいる。1868年(明治1)官軍により会津落城、一家悲運にあう。1879年渡米、ハーバード大学、ペンシルベニア大学などで経済学を学び、1885年帰朝。同年以降、長編小説『佳人之奇遇』を刊行、8編まで出し、1897年まで及んだ。規模雄大な政治小説として好評を博し、作者の熱情が行間にあふれている。1888年『大阪毎日新聞』主筆などを経て、1892年の総選挙に当選、以後政界に活躍したが、終始アジアでの国権伸張を念願とした。1898年大隈重信、板垣退助内閣の農商務次官、1915年(大正4)には外務参政官に就任した。大正11年9月25日、熱海の山荘で病没した。(岡保生)『日本大百科全書』1994年、小学館による)

『佳人之奇遇』。初編明治一八・一〇、二編明治一九・一、三編明治二〇・二、四編明治二一・三、五編明治二四・一二、六編明治三〇・七、七編明治三〇・九、八編明治三〇・一〇。博文堂刊、石版挿絵入りの木版本。主人公は作者の東海散士自身で、刊行期間が十数年の長きにわたったために、当初の構想には組みこまれていなかった散士自身の経歴が加えられて、構成の統一を欠き、歴史的叙述が量的に増加したこともあって、後半は小説的興味に乏しいうらみがあり、結局、未完に終わった。(中略)散士と二佳人の別離と邂逅のあわいにかもしだされるほのかな恋情と、スペインの王党にとらえられた老父を救出してから活動の舞台を求めて異郷を漂泊する幽蘭の数奇な運命とが主要な小説的興味であるが、作者がより力をこめて語っているのは、中国、インド、エジプト、ハンガリー、ポーランドなど、ヨーロッパ列強の帝国主義の犠牲に供された弱小民族の悲史であり、自由と独立を求めてやまないかれらの熱情である。(中略)文体は漢文体を下敷きにした華麗で格調の高いもので、随所に挿入されている漢詩とともども同時代の青年の愛誦するところとなった。近代小説として見るときはさまざまな欠陥が目だつにもかかわらず、明治ナショナリズムの叙事詩として、『経国美談』とならぶ政治小説の傑作である。(前田愛)『日本近代文学大事典』1977-78年、講談社による)

²⁶ 矢野龍溪『経国美談』：矢野龍溪(1850-1931)は、小説家、政治家、ジャーナリスト。豊後国(大分県)佐伯出身。本名文雄。慶応義塾卒。大隈重信の知遇を受け任官したが、政変により下野。立憲改進黨結成に参画。「郵便報知新聞」社長となり「経国美談」を著わして、政治小説家として活躍した。駐清公使、「大阪毎日新聞」副社長を歴任。小説はほかに「浮城物語」「新社会」など。(『日本国語大辞典 第二版』小学館2003年より)

『経国美談』は、政治小説。前篇、明治十六年(一八八三)刊、後篇、同十七年刊。古代ギリシャのテーベの勃興を素材にした一種の歴史小説で、前篇は紀元前三八二年、テーベの内乱に筆を起し、スパルタの専制政府と気脈を通ずるテーベの奸党がクーデターによって政権を獲得したため、アテネに亡命した巴比陀(ペロピダス)ら民主主義者の苦難が語られる。その後、彼らはアテネの正義の士の支援をうけて、奸党に捕えられていた威波能(イパミノンドス)を救出、奇計をもって奸党を倒し、民主政治を回復する。後篇では、威波能に率いられたテーベの軍勢が、スパルタの大軍を打ち破って国威を発揚する。前篇の主題は民権の確立、後篇の主題は国権の伸張で、民権と国権とが分かちがたく結びついていた自由民権運動の性格を反映しているが、竜溪が立憲改進黨に所属していただけに、テロリズムや大衆蜂起が否定的に描かれているのが特色である。(前田愛)『国史大辞典』吉川弘文館による)

²⁷ 末広鉄腸(1849-1896)は、政治家・ジャーナリスト・小説家。伊予の生まれ。「朝野新聞」などに政論を展開。自由民権運動に参加。のち衆議院議員。政治小説「雪中梅」「花間鶯」など。鉄腸の生涯は、穏健な自由主義思想に基づく言論人と政治家としての活躍に求められる。そのめざすものは自由民権を唱道しつつ国民の政治思想の向上をはかり、官民調和を基本とする政党政治の確立にあった。彼の文学活動もその範囲で推し進められたといっている。(浅井清)『日本近代文学大事典』等による)

²⁸ 『春窓綺話』(The Lady of the Lake)：イギリスの詩人スコットの長編物語詩。1810年刊。『湖の麗人』とも訳される。前作『マーミオン』(1808)はフロッデンの戦い(1513。イングランドとスコットランドの対決)の史実を巧みに取り入れた物語詩であったが、この作品はこの戦いで戦死したスコットランド王ジェームズ4世の遺児(後の同5世)を中心に、カトリン湖上の小島に住む美姫エレン、そのエレンをめぐって恋のさや当てをする勇士らを配し、恋と武勇のあやなす物語が展開する。明治に塩井雨江による邦訳(1894)があり、わが国でも愛読された。(朱牟田夏雄)『日本大百科全書』1994年、小学館による)

²⁹ 『自由太刀余波鋭鋒』(Julius Caesar)：翻訳戯曲。五幕。坪内逍遙訳。角書は「該撒(シイザル)奇談」。原作はシェークスピアの「ジュリアス・シーザー」。明治一七年(一八八四)刊。同三四年明治座初演。シェークスピアの翻訳では最も古いものの一つで、浄瑠璃、歌舞伎の文体形式を用いる。(『日本国語大辞典 第二版』小学館による)